

**Alice M. Bacon’s “When Doctors Disagree”:
Antivivisection in the United States and
the Women’s Role in Japan**
(女性の役割と生体解剖：アリス・ベーコンの
「医者の意見の合わぬ時」)

Erika Sunada*

SUMMARY: In this paper, I analyze a short play entitled “When Doctors Disagree,” written by Alice Mabel Bacon (1858-1918) in 1901. Bacon was a teacher from the United States who taught in various women’s schools in Meiji Japan, including Ume Tsuda’s English school. The play was written for her students to perform at Tsuda’s school.

Several medical doctors representing the United States, Britain, Japan, Germany, France, and Russia appear in this play and argue over how to treat their patient, “Go Inkyo Sama” (Honorable retired old man), who is supposed to symbolize China. Whereas the German, French and Russian doctors hope to “vivisect” the dying patient, the American, British and Japanese doctors avert their plan by giving the patient effective medications and thus reviving him. Bacon made the plot of this short play rather simple, but it actually reflected not only the contemporary international conflict in the Far East, but also her deep ambivalence toward the rapidly changing American society.

The doctors’ discussion clearly showed Bacon’s disapproval of “vivisection” and other medical and scientific experiments involving live animals and humans. Although vivisection has a long history, its practice in the United States was relatively new and was being heatedly debated at the time. The sentiments against vivisection reflected the public’s fear of the accelerated pace of scientific progress. While some in the United States regarded vivisection as necessary to ensure scien-

* 砂田 恵理加 Lecturer, Faculty of Political Science and Economics, Kokushikan University, Tokyo, Japan

tific progress, others, particularly middle and upper class reform-minded white women, argued that it was a cruel act toward innocent animals and humans.

Bacon tried to educate the young Japanese women at Tsuda's school in the role they were expected to play in the modernizing of Japanese society by making them act and watch this play. This paper analyzes Bacon's contradictory position as a promoter of modern education in Japan and as an American woman of strong anti-modern sentiment by reading this play as a text that was emblematic of her paradoxical stance.

はじめに

"Who shall decide, when doctors disagree,
And soundest casuists doubt, like you and me?"
—Alexander Pope: 1688-1744, *Moral Essays*. Epistle iii. Line 1.

1901年11月30日、津田梅子が主宰する東京の女子英学塾で「大文学会」が催された。出席者は30名程で、規模こそ大きくなかったものの、聴衆には陸軍参謀総長の大山巖の妻である捨松、海軍少将瓜生外吉の妻繁子など、当時の日本に影響力を持つ女性たちが集まり、熱心に塾生たちの舞台を見つめた。¹

ヴィクトリア期のアメリカの家庭で広く行われていた、パーラー劇や小音楽会を彷彿させるこの文学会では、女子学生によるさまざまなパフォーマンスが行われた。英語を学習し始めて間もない塾生たちが日ごろの成果を披露するこの晴れ舞台のハイライトは、塾で教鞭をとるアメリカ人女性、アリス・ベーコンがこの日のために書き下ろした「医者意見の合わぬ時」(“When Doctors Disagree”)という短い劇だった。英学塾の学生で、この劇に出演した西木政江が「ベーコン先生の新作で、北清事件を仕組んだFarceで御座いました」と後に報告したように、これは北清事変をめぐる当時の国際情勢を念頭に書かれたものだった。²

「医者意見の合わぬ時」は、欧米列強やアジア諸国を人間になぞらえ、ドイツ、フランス、ロシアの清国進出を痛烈に批判するとともに、日本が英米、特にアメリカと協力して清を開発していくことを賞賛するものだった。この劇は一見すると、当時の日本の帝国主義的な政策に迎合

し、国際情勢をきわめて単純で短絡的に捉えたものである。しかし、20世紀に入ったばかりの日本で、アメリカ人女性が日本女性のために書き下ろしたという背景を考えると、これが彼女たちの人種、科学、近代社会におけるジェンダー概念をめぐる複雑な思惑の交錯の上に成立していたという構図が見えてくる。

本稿では、この劇の脚本を当時の歴史的な文脈に照らして分析することで、ベーコンをはじめとする初期の英学塾関係者が、アメリカ社会で培われたジェンダー観に基づいた女性の使命感と連帯感をいかに強化しようとしていたかを考察していく。1901年という世紀転換期の日本で演じられたこの劇は、アメリカの白人中産階級の伝統的な価値観を土台に理想の女性の役割を確認し、日米の女性たちで共有しようとするものであった。明治日本の女子高等教育の現場で使われた教材の中に、アメリカで形成された理想の女性像がどのように組み込まれていたのか、それがこの劇にかかわった女性たちに何をさせようとしたのかを考えていきたい。

1. アリス・ベーコンの世界と女子英学塾の女性観

ベーコンは1858年、アメリカ合衆国コネチカット州ニューヘイヴンに生まれた。父親のレナード・ベーコンは、穏健な立場から奴隷制廃止と黒人の地位向上を説いたことで知られた、会衆派の有力な牧師だった。一家は敬虔なクリスチャンで、レナードの成人に達した7人の息子のうち4人が牧師となり、女性たちの多くも教会を中心とした活動に従事していた。³ 経済的に余裕があるとは言えなかったが、ベーコン家は北東部を中心に多くの人々の尊敬を集める名家だった。

アリスの父、レナード・ベーコンの生涯を研究したヒュー・デイスによると、奴隷解放活動に熱心な点などを取り上げればレナードは確かにリベラルだったが、その「自由への愛は、選択的」なもので、特にそのジェンダー観は当時主流だった、いわゆる「異なる領域 (separate spheres)」イデオロギーを逸脱するものではなかった。「異なる領域」イデオロギーに基づいた価値観では、愛と信頼関係によって結びついた一組の夫婦と少数の子供を中核とする、近代西洋の中産階級に多かった形態が正しい家族のあり方で、その中でこそ、女性たちは弱者への憐みや無私な愛情といった美德、あるいはバーバラ・ウェルターがその研究の中で定義したように、宗教的敬虔さ、純潔さ、家庭性、従順さに代表さ

れる「真の女性性」を發揮できる/すべきと考えられた。⁴そして、母である女性が「女性の領域」である家庭で子供 主にやがて社会に出ていく男児 の養育を通じ、彼らに徳を伝え、立派な市民に育てることによって、貨幣や世俗的な成功を評価基準とする、「男性の領域」である市場経済社会を相対化しうる価値観を創り出し、バランスのとれた文明的な社会を可能にするとされた。⁵こうしたジェンダー観にのっとり、レナードも女性は直接政治にかかわるべきではなく、あくまでも家庭を中心とする「女性の領域」にとどまりつつ、上品さ、俗世の穢れとは無縁の道徳観を發揮することで改革を促進し、社会を向上させるべきだと考えていた。⁶このような家長の下、14人の兄弟姉妹の末娘として育ったアリス・ベーコンは、自身は生涯独身でキャリアを重ねつつも、家庭の主婦を一義的な女性のあり方とする白人ミドルクラスの性役割概念から 時にそれを拡大解釈することがあったとしても 大きく外れた主張をすることはなかった。

アリスが14歳のときに、ベーコン家は初の官費日本人女子留学生である山川捨松のホストファミリーとなった。岩倉使節団に連れられて1871年に渡米した山川は、ベーコン家に引き取られた当時12歳で、年齢の近かったアリスとその後11年に渡り「姉妹のように」育った。⁷山川を通じてアリスは、同じく岩倉使節団と共に渡米した津田梅子や永井繁子とも知り合うことになった。津田は帰国後教師の道を歩み、永井は海軍の将校だった瓜生外吉と結婚し、音楽教師として女子教育に携わった。⁸山川ものちに元帥陸軍大将となる大山巖と結婚し、その社会的立場を活かし、日本女性の地位向上に貢献した。長期留学という当時としては特異な経験をした日本人エリート女性たちとの親密な交流関係は、のちにベーコンに二度に渡る日本滞在を決意させるとともに、尽きることのない日本への関心を支える土台となった。

南北戦争後に解放奴隷の教育のためにバージニア州に設立された、ハンプトン師範農業学校(Hampton Normal and Agricultural Institute)で教職についていたベーコンは、1888年、すでに帰国していた津田らの呼びかけに応え、来日した。華族女学校や東京女子高等師範学校で教え、1年後に帰国したが、初来日からほぼ10年後の1899年、女性のための教育機関を作りたいという津田を助けるため、アメリカでの職を辞し、再び来日している。この時には津田の英語学校である女子英学塾(後の津田塾大学)の設立を助け、2年もの間無償で教えると同時に、他の女学校の教壇に立った。こうしたのべ3年に渡る日本滞在の経験を基に、『明治日本の女たち』(*Japanese Girls and Women*, 1891 以下『女たち』と表記) およ

び『明治日本の内側』(A Japanese Interior, 1893)等、日本に関する著作を英語で出版し、知日家、特に日本の女性や家庭に関する専門家として欧米圏で知られるようになった。⁹

上記のベーコンの著作の中でも、幾度も版を重ね、1902年には拡大改訂版も出された『女たち』は、津田の協力により執筆された作品だった。¹⁰ この本の執筆を通じ、ふたりは日本人女性の現状と課題を整理し、のちに津田が女子英学塾として開校する学校での教育方針を練りあげていった。本書で示されたジェンダー観は、賃金労働などの社会的な活動を男性の役割とする一方、家事と子育てを中心とする家庭での役割を女性に期待する、先述の「異なる領域」イデオロギーにのっとったものである。したがって『女たち』は、日本の女性が十分な教育を受ける間もなく早々に親の決めた相手と結婚させられ、婚家で「給仕やお針子など家政婦のごとく」扱われることを非難する一方、女性が男性と同じ様になることや、非婚を称賛するものではない。¹¹ ベーコンは女性が経済的に自立することで、望まない相手との結婚を避けられるとしているが、それは「よい家庭と思いやり、愛情、そして永遠の幸せを保証してくれる男性」との結婚を前提とした上での、二次的な選択だった。¹² ベーコンがここで提示した望ましいあり方は、教育を受け啓蒙された女性が、愛のある結婚をして家庭内で強い立場を確保し、妻として「夫の友人となり、よき伴侶」として対等な関係を築き、母として「子供に徳を教える教師」となることだった。¹³ 「西洋文明の持つもっともすばらしく優れた側面に向かって、日本がそのまま進歩していく」ためには、日本の女性が教養ある主婦、母親として安定した立場を築かなければならないとベーコンは述べる。¹⁴ 「将来英語教師の免許状を得ようと望む」女性に教育を授ける場でありつつ、生徒たちに「婦人らしい婦人」であることを求めた女子英学塾の教育思想は、こうしたアメリカの白人ミドルクラスに主流だった当時の女性観に立脚している。¹⁵ 本稿でとりあげる「医者意見の合わぬ時」も、その教育の一環として演じられたものだ。

男女に異なる役割を期待する「異なる領域」イデオロギーは、女性の母として妻としての役割を崇高なものとすることで、女性の政治的諸権利を否定し、家庭に縛りつける力を持った。しかしその一方で、それは女性たちが数々の社会改良運動へ参入していく思想的背景をも提供することになった。女性に特有とされた美徳の価値が重んじられたため、それを家庭の外の、より広い社会に還元していく活動が認められていくようになったからだ。男性よりも高いとされた道徳性を根拠に、女性たちは主婦や母の役割を再定義し、家庭内での立場を強化するとともに、家

庭の外での社会活動に身を投じていった。このような女性たちのアクティヴィズムをドメスティック・フェミニズムと呼ぶが、生涯独身を貫き、教育に情熱を傾け、「女性の領域」である家庭の外で活躍したベーコンや津田の選択も、こうしたアメリカ女性の価値観を反映したものであった。¹⁶彼女たちの人生は、母性を最上の女性の徳とするヴィクトリア期のアメリカの理想の女性の人生からは外れるように見えるが、その活動の内容自体は、女性性を本質化するという意味で保守的な、そして当時主流だったジェンダー観と矛盾するものではない。彼女たちは、女性だけに備わったある種の徳を信じ、その徳こそが社会を浄化、改良し、進みゆく文明を完全なものにすると考え、献身的に仕事に取り組んでいった。それは、女性が人間としての権利や平等性を勝ち取ろうとする、より近代的なフェミニズム　ドメスティック・フェミニズムに対し、パブリック・フェミニズムと呼ぶべきもの　とは異なるものの、社会全体への女性の影響力を拡大しようとするという意味においては、フェミニズムのひとつのあり方だったと言える。

このような思想背景を持つベーコンは、女子教育を通じて日本を近代化することに尽力しつつも、その近代化の流れに身を置くことに、ある種のためらいを覚えていた。¹⁷最初の日本滞在からの帰国後、都市での便利な生活から意図的に離れ、少なくとも気候が許す夏の間には自然の中で簡素な生活をおくろうとしたことから、そうした傾向をうかがい知ることができる。¹⁸その感覚は歴史家ジャクソン・リアーズが著書、*No Place of Grace* で取り上げた「アンチモダニスト」とも類似していたが、ベーコンの場合はアメリカ北東部に留まり近代に対する複雑な感情を、主に消費の形で表明していた「アンチモダニスト」たちとは異なり、近代文明の体現者として、日本の近代化の原動力としての役割を期待されていた。¹⁹彼女は欧米主導の近代化プロジェクトの中に身を置き、周囲の日本人からも近代の象徴的存在としてとらえられ、その役割を自分でも積極的に受け入れつつも、近代のもたらす社会変化に不信感を募らせるという矛盾に直面していたのである。日本女子教育に従事することで近代化の一端を担いつつも、加速度的に近代化の進む社会の変化に対し漠然とした不安を抱き続けたベーコンは、アメリカほどは「進んで」いない日本について書くことで心理的な癒しを得ていた。ベーコンが抱えたジレンマは、欧米諸国をモデルに急速な近代化を進めつつも、こうした国々とは異なる固有の近代国家としてのアイデンティティと、その中で女性の役割を模索しなければならなかった明治日本のエリート女性たちが直面した矛盾との間に奇妙な相互依存関係を築いた。ベーコンは

相対的には「遅れている」が礼儀正しく素朴な日本社会と、その中で献身的に努力する女性たちを賛美することで、アメリカの進みすぎた近代物質主義文明への批判とすることができたし、彼女と親しかった日本女性たちはベーコンのこうした語りの中に日本の独自性と自己意識を確保することができた。「医者意見の合わぬ時」の、とりわけ生体解剖をめぐる議論の中に、そのようなアンビバレンスに満ちた女性たちの協力関係を見ることができる。この劇を分析することを通じ、変わりゆく世紀転換期の社会の中で、アメリカの中産階級の家で育てられた伝統的な価値観に基づき理想の女性の役割を模索していた日米のエリート女性たちへの理解を深めていきたい。

次節では「医者意見の合わぬ時」の筋を概観し、主役である「ドクター・日本」という役柄の意味を考察する。第3節では、劇中、唐突に表れる生体解剖の歴史的意義を考察する。ベーコンはこの劇の中で、清国を生体解剖の危機にさらされる弱者として描くことで、その保護国化を正当化しようとしたのと同時に、旧家出身のアメリカ知識人として自らが抱えていた進みすぎた科学に対する不安感を表明していた。さらに第4節では、当時のアメリカで生体解剖の是非に関する論争が、ジェンダーをめぐる問題として議論されたことについて考察していく。ベーコンにはこの劇にあえて生体解剖を盛り込むことで、日本人女性たちに特定の女性の役割を演じさせようという意識があったものと思われる。舞台の上で、ジェンダーは文字通り演技された。²⁰ ベーコンは日本の女性たちに、女性らしい美德をもって近代のもたらす害悪に対抗し、より完全な文明社会を達成することを期待した。しかしその女性の役割は、男性の姿を借りて演じられなければならないという、さらなる矛盾をはらんでもいた。一見単純で他愛のない短い劇であるが、ここにこの劇にかかわった日米の女性たちが直面したジレンマの交錯を透かし見ることができる。

2. “When Doctors Disagree: An International Farce (Written especially for the Young Ladies of the Joshi Eigaku Juku, Tokyo)”²¹

本稿冒頭で説明したように「医者意見の合わぬ時」は、英学塾の催物である第2回大文学会の出し物のひとつだった。この日のプログラムには歌やピアノ演奏、英詩の暗誦、シェイクスピアの『じゃじゃ馬ならし』、ルイス・キャロルの『不思議の国のアリス』から一場面、「アリ

スとにせ海亀」等の題目が並び、その最後の出し物として演じられた。²² 一幕のみのこの劇の脚本は、文学会の開催から約一ヵ月後に、英学塾の教員らが発行していた英語学習者向けの雑誌、『英学新報』に掲載された。序文には、「此の喜劇は本社のA. M. Baconが特に起草したものであり、支那現状を写したもの」とある。²³ 劇ではまず、舞台中央で、中国服を着た老人、Go Inkyo Sama(「ご隠居様」)が苦しそうにベッドに横たわっている。そばにはO Bā San(「おばあさん」)が付き添い、かいかいしく看病している。ベッド脇のテーブルにはMeishin Mixture(「迷信薬」)が置いてあり、「おばあさん」はそれをこの病人に飲ませようとしている。効能に疑念を抱きつつも、「ご隠居様」はこれを飲み、苦しげに眠りにつく。「おばあさん」が退場すると、病室には「ご隠居様」の侍医である4人の医師が入ってくる。Dr. Eikoku(「ドクター・英国」)とDr. Roshia(「ドクター・ロシア」)は病人の頭の方に、Dr. Fransu(「ドクター・フランス」)とDr. Doitsu(「ドクター・ドイツ」)は足元の方に立ち、ベッドを囲み、議論をはじめめる。

最初に病人を診断するのは「ドクター・ロシア」である。「この病人はどうせ長くないな……友達も皆彼を見捨ててどこかに行ってしまった」と宣言し、「今こそ、生体解剖(vivisection)の実験をするのにまたとない機会だ」と述べる。ドイツ、フランスはこれに同調するが、英国だけは反対し、窓やドアをあけて新鮮な空気を入れて病人を治すべきだと主張する。そこに今度はDr. Nihon(「ドクター・日本」)が登場する。日本は迷信薬の瓶が置いてあるのに気づき、英国の助けを借りて、解毒剤であるElixir of Meiji(「明治神薬」)を「ご隠居様」に飲ませる。すると、瀕死の患者は息をふきかえす。

次にDr. Beikoku(「ドクター・米国」)が登場する。日本に「この患者への治療法を決めかねているのだが、どうしたらいいか」と尋ねられると、「ドクター・日本の明治神薬、ドクター・英国の新鮮な空気と運動による治療」に合わせて、「自由と平等の混合薬」である「私の特製強壯剤」を処方すべきだと答える。この混合薬を飲むと、「ご隠居様」はようやく回復する。そして米国に患者として「どの医者を選ぶかね？」と尋ねられると、彼は迷わず日本に向かって手を差し出す。劇の最後は活人画(tableau vivant)で、日本が「ご隠居様」の手を握り、英国はその脇に控え、米国は背を支える。他の三国の医師はしかめ面をして傍観している。最後に君が代がピアノで演奏され、幕が下りる。

『英学新報』に掲載された脚本には、劇で用いられる様々な比喩について細かい注が日本語でつけられている。ベーコンはこの雑誌の編集者で

あったから、これらの解説は十分に彼女の意図を反映していたと考えられる。注によると、劇中「年寄りの」「耄碌した」「ほとんど死んでいる」などという否定的な表現で描写される「ご隠居様」は、清国のことを指していた。その「ご隠居様」に付き添う「おばあさん」は「古風な看護婦(即ち西太后)」とされている。それぞれの名が示す列強各国を擬人化した6人の医師たちのうち、独、仏、露が「ご隠居様」を解剖しようとするのは「暗に支那分割」を示している。²⁴ 劇中「拳闘家」、つまり義和団への言及があり、西太后である「おばあさん」が「逃げた」とされていることから、この「支那現状」は1900年の北清事変を指していた。²⁵

ベーコンは清を年老いて現役を退いた男性として描き、この老人の衰えた身体に注がれる医師たちの医学的好奇心に、列強の帝國的野心を重ねた。ロシアの「生体解剖をしよう」という提案にドイツとフランスは賛意を示すが、英国だけは恐ろしがつて手を出そうとしない。ロシアは「ご隠居様」の頭を抱え「私は頭をもらおうよ。君たちは別の好きなところをどこでも取りたまえ」と宣言する。これを受けてドイツは、「ご隠居様」に必要なのは「右腕を肩から切除する」ことで、その右腕を使って自分の研究室で実験をしてみたいと述べる。フランスも「彼の足をもらおう」と賛同する。ここでは、「ご隠居様」の頭は満州、右腕は山東地方、足は清国の南部を指していた。

生体解剖に反対する英国は、「窓とドアを開けて、新鮮な空気と日光が彼を助めるかどうかためしてみよう」と提案するが、これは門戸解放を通じて清国を救おうとするという意味である。しかし英国は、ドイツに「英国氏、君は好きなだけ患者を取って手に余るほど抱えておいて、この耄碌爺さんを私たちが好きなようにするのを止めるなんて、フェアじゃないじゃないか」と言い返されてしまう。英国は世界中にたくさんの「患者」、すなわち植民地を抱えているという指摘である。結局、英国は生体解剖には最後まで同意しないものの、「ご隠居様」が死んだあかつきには「死体検査に立ち会う」ことにする。清国分断には賛成しないが、実際にそれが行われる際には、自分も分け前にあずかろうという英国の態度を示していた。

日本はこうしたやり取りの後に登場するが、それは日本が世界の植民地獲得競争に遅れて参入した国であることを示している。日本が患者に「明治神薬」を与える際には英国の手を借りるが、これは当時の日英同盟への気運を表していた。一方、「ドクター・米国」は「下町の事務所から」やって来たことになっているが、これは北清事変の際にアメリカが南方のフィリピンから軍艦を派遣したことを指す。幕引きの際には、英米日

を演じる役者は一緒に並び立つことになっているが、それは当時の国家間の協力関係を示していた。

ベーコンはこの劇の中で、清国と日本の間には特別なつながりがあり、欧米諸国が入り込む余地がないことを強調している。日本は「[ご隠居様の]体について私は良く知っている」と主張しているが、これは「日本は支那の国体人情に通じている」という意味だった。²⁶日本のこのような主張は「君は予の事を能く承知しているから、君に依頼して治療して貰う」と、「ご隠居様」からも承認される。²⁷ベーコンは清国と日本の間には他国にはない共通項があることを強調し、日本による保護国化の正当性を説いていた。

清と日本の近さが強調される一方で、患者である清国とは異なり、日本は欧米諸国と同じ「ドクター」であった。医者、科学的な専門知識を駆使して、患者に特定の病名を付与し、その治療にあたる権威を有する。ロシアによると、「ご隠居様」は「年寄りで、両目とも失明、血液循環も良くなく、貧血症で中風」であった。アメリカも「中風症、内障眼、貧血症、老衰症」と見立てていた。²⁸このように診断された清の病む身体は、その後治療という名の下に、保護の対象とされる。²⁹

「医者意見の合わぬ時」で描かれた「ご隠居様」の病気は、清の劣等性を示唆するものだ。自己の身体管理ができず、病気を惹きつけてしまう劣等な人種は、文明の権威をもつ医師の保護を必要とするとされた。その医者の権威の前に、往々にして患者は無力である。ベーコンは、こうした医師と患者のダイナミズムに、宗主国と植民地・保護国の不均衡な関係を重ねあわせた。ただし、この劇では、脈をとったり眼球を調べたりと、病人の体に触れ、医学用語を使い病気の診断をするのは、欧米の医師たちのみである。「ドクター・日本」が「ご隠居様」の体を診ることはない。日本が発見するのは、患者の病気ではなく「迷信薬」という病を引き起こした原因である。彼が解毒剤を用いて対応するのもその「迷信薬」であり、「ご隠居様」の病そのものを直接治療するわけではない。また日本が他の列強の医師たちの診断や治療法を直接的に否定することはない。

ベーコンは日本を清と近い存在として描きつつも、同時に患者ではなく医者、つまり宗主国になり得る文明を有するとしている。「ドクター・日本」は、独仏露英米の欧米白人の国々と同様、科学的専門知識を有しつつ、白人の判断を否定することのない存在である。しかし彼は単に白人に追随するわけではない。エドワード・ショーターによると、1880年代に登場した「近代的な医者」の近代性は、患者の病を治療する能力で

はなく、患者の病気が何であるかを正しく診断ができることに依拠していた。³⁰ 病気の診断は医師の権威の根拠であり、正確な診断こそが医者を近代的な科学者にし得るものだった。その意味で、病気の原因を正しく判断した日本は、自己の利権に惑わされず、客観的判断を求める冷静な科学者でもあった。

3. 清国を切り分ける：生体解剖の文脈

清国の分断化を人間に対する生体解剖に置き換えたベーコンの比喩は、きわめて直接的であるために、その意図するところは明らかなようにも思える。しかしベーコンが国際情勢を描写するためになぜ生体解剖というモチーフを使ったのか、あえてさらに考察したい。

当時、生体解剖は欧米の医学界のみならず、女性を含めたミドルクラス以上の市民の間で大きな論争の火種となっていた。科学的知識が急速に進歩するなか、医師は臨床的観察に基づいて治療を施す、現場志向の職人的な存在から、特殊な専門知識を身につけた科学者へと変化していた。³¹ それに伴い、医師のあるべき姿について、世紀転換期のアメリカ社会には様々な論争がまきおこった。そのひとつが、医学知識の科学的発展に不可欠であるとされた生体解剖に反対する運動である。アメリカ白人中産階級の間で広まっていた生体解剖をめぐる一連の議論を、ベーコンは当然認識していた。

生体解剖に反対する運動は、もともとは動物虐待を防ぐ人道的な活動から派生した。動物虐待反対の動きは当初はイギリスで活発にみられ、アメリカでは南北戦争後に広まっていく。1860年代末には、過度の使役や単なる虐待だけではなく、科学の名の下で行われる動物実験を問題視する組織も作られるようになった。³² アメリカでは1883年にPennsylvania Society for the Prevention of Cruelty to Animalsから分離する形でAmerican Anti-Vivisection Society (以下 AAVS) が作られたのを皮切りに、その後1910年代までに反生体解剖 (antivivisection) に活動を特化した組織が数多く作られた。³³ また、団体名に反生体解剖を掲げていない他の動物保護団体も、生体解剖の禁止、あるいは制限を求めている。

こうした団体は動物を食用に屠ることや、「無学な家畜商人」や「半ば獣と化した飲んだくれの馬車引き」が不必要に動物に鞭を加えることよりも、科学者の生体解剖に強く反発した。知的で慈愛に満ち、病人の苦しみを取り除くべき医者が、「冷酷に、意図的に、科学的に痛みを加える

ことは、あまりにひどく、不吉で」許しがたかったからだ。³⁴ 生体解剖実験は、アメリカでは実際にはさほど頻繁に行われなかったにも拘わらず、「どちらかというと[イギリス人よりも]アメリカの方がより過激に反発」したと言われている。³⁵ 1896年にはジェームズ・マクミラン上院議員が、アメリカ医学の中心地だったワシントンDCでの生体解剖を規制する法案を提出するに至った。これは最終的には否決されたが、世紀転換期における生体解剖反対の動きの盛り上がり背景に、様々な団体から広範な支持を受けた。³⁶

当時反生体解剖運動に加わったのは、奴隷制廃止運動に関わった者や「医療科学の唯物主義に反対する聖職者、実験室での教育が一般的になるまえに医者になった人々」が中心であった。³⁷ 黒人奴隷解放とその地位向上に取り組んだ牧師一族の出身で、宗教教育に熱心な敬虔なクリスチャンであったという背景は、ベーコンが反生体解剖活動に加わった人々のネットワークの中にいたことを示している。例えばベーコン初来日中の1889年の7月、彼女の東京の自宅を有名な監督派の牧師、フィリップス・ブルックスが訪問しているが、当時彼は生体解剖に反対する著名人としてしばしば名を挙げられた人物だった。³⁸ こうした交友関係から考えても、アリス・ベーコンが生体解剖を否定的にとらえていたことに不思議はない。

さらにベーコンが、常に「少なくとも一頭の馬と犬とを飼って」いたほどの動物好きだったことを考えれば、そもそもは動物愛護運動だった反生体解剖活動に共感を寄せていたと想定できる。³⁹ 彼女が動物を可愛がったことを示す事例は、枚挙にいとまがない。初来日の際にはブルースと名付けた飼い犬をアメリカから伴ったし、英学塾の校史はベーコンの思い出として、彼女が「動物を愛した」ことを伝え、迷い込んだ野良犬に「可哀想」と名づけて愛育したエピソードを紹介している。⁴⁰ その関心は普通の動物好きの域を超えたもので、帰国後の1909年ごろには16頭もの大型犬のイングリッシュ・シープドッグを飼育し、ある新聞記事がそれについて特筆したほどだった。⁴¹ ベーコンが動物に並々ならぬ関心と愛情を注いだことを考えると、彼女が科学から動物の命を守ることを始点とした反生体解剖運動に同情的だったことが推測できよう。

「医者意見の合わぬ時」を読み解く上で重要なのは、ベーコンが反生体解剖の闘士であったかどうかというよりも、彼女がここで生体解剖を明らかに否定的に扱っているという事実である。劇中ドイツは、「ご隠居様」は「腕一本でもどうせ平気だ」と老人の右腕を肩から切除しようとするし、ロシアは「彼は頭だって無くたって同じように平気さ。いず

れにせよ彼は頭をあんまり使ってないしね。私の方が役立たせることができるよ」とうそぶいている。⁴² ドイツとロシアの欲望をむき出しにしたこの表現からは、ベーコンの生体解剖への強い反感を読み取れる。

劇中、生体解剖の危機にさらされる清国は、動物ではなく人間として描かれている。当初、実際の反生体解剖運動が問題にしたのは動物に対する暴力であったが、しだいに科学の名の下に行われる暴力から保護されるべき対象に、ある種の人間が含まれるようになっていく。アメリカでは、動物に次いで保護の対象とされたのは、まずは人間の子供だった。動物と人間の子供は「無力であるという点で同じ」で、不当な扱いに抗議の声をあげることができないからこそ、同じように保護されるべきと考えられたのだ。⁴³ さらに生体解剖の是非をめぐる議論が加熱するにつれ、「囚人、兵士、経済的報酬と引き換えに人体実験に応じる人々」までを含むようになった。⁴⁴

スーザン・レドラーによると、生体解剖という言葉は、字義通りには有機体を切り分けることだが、当時は解剖だけではなく、生物を利用した医学的な実験すべてに使われた。同様に、人間への生体解剖は、治療目的ではない、人間を使った実験のすべてを意味していた。⁴⁵ ベーコンは「医者意見の合めぬ時」において、文字どおり人を生きたまま切り分けることを意味しつつ、当時生体解剖という言葉が持っていた胡散臭さを最大限に利用した。生体解剖に賛成する独仏露の医師たちは、患者のためだと取り繕いながらも、解剖実験を通じて「我々の任務を進歩させるのに何ができるか考えてみようじゃないか」と本音をのぞかせる。⁴⁶ 彼らの「治療」、つまり生体解剖が決して患者のためではなく、これを行う医者たちのために行われるのだという指摘である。同様に、清国分断は列強全体の利権にはなるが、清国の益にはならないことを意味している。一方の日本は患者の益となる「正しい」診断を下し、患者の同意を得た上で治療を行う。それは科学に名を借りた暴力ではなく、患者の立場を尊重した診療であるというのだ。

この劇でベーコンが清の分断化を「ご隠居様」の生体解剖になぞらえたのは、欧州列強の帝国主義的欲望の暴力性を訴えるためであったのと同時に、清が自分を守る手立てを持たない、他者の保護が必要な無力な存在であることを印象付けるためだったと言える。さらにベーコンはこの無力な清の保護者としては、英米の承認を得た日本が最適であるという主張をした。それはこの英語の劇の演じ手および観客の多くを占めていた日本人女性たちの愛国心をくすぐり、国民意識を高めるとともに、日米の連帯感を強化するものだった。

またベーコンは、生体解剖の非道さを描くことで、進みすぎた科学に対する危機感を表明してもいた。反生体解剖運動は人道主義活動から生まれたものであると同時に、加速度的に進む科学技術に対する人々の疑念を背景に展開したものであった。世紀転換期の科学の進歩は、それを従来のように教養ある一般人が理解できるものから、普通の人にはまったく理解のできない専門知識へと変容させていた。ジェイムズ・ターナーによれば、それまで「人間の知識の全分野は、第一級の知性を持つ人なら誰でも把握できるもの」で、「わずかな教育があれば誰でもライエルやダーウィンを読んで理解」できるはずだった。しかし急速な科学と医学の発展の結果、例えば「ディヴィット・フェリアーの脳の機能の局在性の研究」は専門知識がなければ理解できなくなってしまったのである。こうした中、急速に進みゆく進歩に取り残された感覚を抱き当惑していた同時代の教養ある人々が、生体解剖に対し「疑念を深めたのも当然」だった。⁴⁷ 生体解剖を否定的に描いたこの劇は、反生体解剖運動に共感をよせたアメリカの知識人であるベーコンの、いきすぎた科学への疑念を背景として生まれたのである。

ベーコンが日本に与えた役割は、矛盾したものだ。日本を白人と同じ文明国の一員としながらも、病を抱え、迷信にとらわれた前近代的な清国とも否定できない類似性——人種的な近さと読むことができる——を持つ存在としている。女子教育を通じ、日本を近代化する一端を担いつつ、生体解剖を否定的に描くことによって、進みすぎた科学に対する不安感を表明してもいたベーコン自身の矛盾を内包する存在として、「ドクター・日本」という役柄は作り上げられた。同時にその矛盾は、欧米にならい急速に近代化を進めつつも、欧米諸国とは異なる近代国家日本として独自のアイデンティティを模索しなければならなかった明治日本のエリート層のジレンマを反映するものだった。西洋文明の知見を身につけた科学者でありながら、東洋の国として清とも近い存在で、進みすぎた科学にとらわれた列強諸国には無い、弱者を救う慈悲の心を持つ「ドクター・日本」は、当時の日本では例外的な存在だった、アメリカで高等教育を受けた津田ら日本人エリート女性たちの強烈な国家意識と使命感に寄り添うものだったろう。こうした女性たちと親しかったベーコンは、彼女たちの心情を「ドクター・日本」という人物を通じて描き、これを演じさせることで英学塾の生徒たちにも同様の意識を持たせようとしたと言える。

4. 不在が語る女性の使命

さらに「医者の意見の合わぬ時」が1901年にアメリカ白人女性によって執筆され、その生徒の日本人女性らによって演じられたことの意味を考える上で重要なのは、アメリカで展開された反生体解剖運動の中の女性の役割の大きさを理解することである。当時の反生体解剖論者たちは、生き物の身体を切り分けその命を奪うことは、飲酒や暴力と同様、女性的な慈悲の精神に反する「男性的な不正 (masculine-coded improprieties)」のひとつと位置付けていた。⁴⁸ 中国大陸の「分断」をもくろむ独仏露の三国が男性的で冷血非情な侵略者であるのに対し、清国に治療を施すことでその野望を砕く日本は、科学的でありつつ女性的な慈悲の精神をもった人物として描かれていた。ヨーロッパ諸国の生体解剖という暴力を否定し、弱者を救う徳を持った「ドクター・日本」は、この劇にかかわった女性たちが感情移入しやすい要素で成り立っている。ベーコンは「医者の意見の合わぬ時」を若い日本人女性に演じさせることを通じ、彼女たちと「正しい」女性の価値観を共有しようとしていたと言える。

アメリカでは1890年代までに、上流から中流階級の女性が数多く反生体解剖運動に加わった。当時のアメリカで最も影響力を持った女性運動組織は禁酒を推進する女性キリスト教禁酒同盟 (Women's Christian Temperance Union) だったが、反生体解剖活動はこうした組織とも結びつき、19世紀末には「女性の活動」だと考えられるようになった。⁴⁹ 社会改良運動にかかわった女性たちは、生体解剖を飲酒や暴力と同様、女性の手で改良すべき、野蛮かつ男性的な問題として認識し、「非人間的にも生体解剖をする者 (brutalized vivisector)」と「残酷な飲んだくれ (cruel drunkard)」は従兄同士だと糾弾した。⁵⁰ この時代までに教会活動の主たる担い手となっていた女性たちにとって、生体解剖は慈悲の精神を説くキリストの教義に反する、罪深い行いだった。彼女たちは解剖が行われる実験室を地獄に例え、「神の創った罪無き動物にとっての地獄を、この世に作り出す必要はない」と訴えた。⁵¹ 医学界の若い世代の男性の多くが生体解剖を医学の進歩のために必要であると主張したのとは対照的に、世代を問わず女医の多くが生体解剖に否定的であったことは、こうした運動の理念と女性性との強い結びつきを示している。⁵²

当初アメリカの反生体解剖活動組織には男性の所属もあったが、世紀転換期を迎え、解剖の是非をめぐる議論が激しさを増し、両陣営の態度が硬化していくにつれ、運動の担い手の男女比は大きく崩れていく。例えば全米の先駆けとなったAAVSの委員会には1880年代前半には10名前

後ずつ男女半々の委員がいたが、1895年には3名の男性委員に対し、17名の女性が委員会の席につくようになった。⁵³ 同じころ、こうした組織が活動の際に使うレトリックも、さらに強く女性の使命感に訴えかけるようになっている。1895年、ある女性反生体解剖活動家は、全国女性会議(National Council of Women)の大会において、「どうか皆さん、善なる、そして真なる女性性に伴う騎士道精神をもって (with the chivalry which belongs to good and true womanhood) [生体解剖のために] 苦しんでいる者、無力な者たちの味方となってください。この[生体解剖という]不正は、女性たちが自らの役割を果たさない限り、是正されることはありません」と呼びかけた。⁵⁴ 女性の徳こそが生体解剖という男性的な悪業を終わらせる力となり、より良い社会を作るとされたのだ。この「真なる女性性」という言葉からも分かるように、アメリカにおける女性の運動としての反生体解剖活動は、一般的には参政権運動をはじめとする女性の権利拡大を求めるフェミニズム運動とは結びつかず、女性の慈悲の精神や母性を強調した社会改良運動として展開した。母性が反生体解剖運動にかかわる根拠とされたのは、子供たちに残酷さの悪と思いやりの心を教えることは、母親の役割だと考えられていたからだ。モラルの守り手として、母として、女性は飲酒に反対するのと同じように生体解剖に立ち向かった。

こうしたアメリカでの活動の状況を考えると、ベーコンが生体解剖を否定的に、そしてそれと対抗する勢力を肯定的に描いた「医者意見の合わぬ時」を日本の若い女性たちに演じさせたのは、彼女たちと反生体解剖の精神に代表される正しい女性のあり方を共有するためだったと理解できよう。ベーコンを含め、使命感に燃えたアメリカ人女性たちの認識の中で、反生体解剖活動は国境を越えて女性たち、とりわけ他者の苦しみに敏感であるべき、教養ある中流階級以上の女性たちが担うべき運動だった。「ドクター・日本」は声高に生体解剖の酷さを非難することはないが、投薬治療を提供することでこれを否定する。アメリカの協力を得てこうした正しい行動を取り、称賛を受ける「ドクター・日本」は、アメリカ人女性であるベーコンの指導を受け、英語と共に正しい女性の役割を身につけようとしている日本女性たちの姿と重なる。当然のことながら、ここで言う女性の役割の「正しさ」は、当時の急進的なフェミニズム活動家が訴えた人権意識や個人の自由に基づいたものではなく、知的エリート族に生まれ育ち、女性の徳こそが社会を浄化し向上させると信じ、様々な形で社会改良運動に取り組んだベーコンと、その価値観を共有した津田らの意識を反映したものであった。

反生体解剖活動と女性の役割意識との間に強いつながりがあった一方で、ベーコンはこの劇にほとんど女性の役を登場させていない。唯一の女性登場人物は「おばあさん」こと西太后だが、彼女は肯定的な役を与えられていない。日本女性が演じたこの劇に、なぜ積極的な女性像が描かれなかったのだろうか。より具体的には、主役の「ドクター・日本」はなぜ女医ではなかったのだろうか。この劇に日本人女性の配役が不在だった事の意味を考察し、英学塾関係者が理想とした女性像についてさらに分析していく。

劇中、「ドクター・日本」が男性だったのは、女性医師がこの劇にかかわった人々の理想の女性像の範疇になかったことがひとつの理由であろう。ベーコンは『女たち』の中で、日本の看護婦を称賛する一方、女性医師については医学校を卒業した者があるにせよ、日本に「働き口が今のところあるかは疑わしい」と否定的な状況を一言述べるにとどまっている。看護婦を教師と並び需要の増えている日本の女性の職業として紹介し、特に従軍した看護婦たちが勇気だけではなく「女性らしい気づかいや優しさ」を持って任務にあたった、と褒めたたえているのと対照的である。⁵⁵「日本にても其中には医者となる婦人も出来るでございますやうが先あると致した所であまりないことでございます」と述べた津田もまた、積極的に女性医師の活躍を待ち望んでいるようではない。⁵⁶津田やベーコンの意識の中に優れた女性像として女性看護師があっても、女性の医者は不在だった。子供を養育する母親の資質が必要だとされた教師も、弱者への憐みと献身が必要だとされた看護婦も、「異なる領域」イデオロギーに沿って女性の適職と考えられるものだった。伝統的な女性の役割を拡大解釈したこれらの職業は、賃金労働という意味では女性の社会進出を促進するものであったにせよ、女性の役割そのものを否定するものではなかったのだ。しかし高度な専門職である医師は、筆者の考える女性の役割を逸脱するものだったのだろう。女性を英語教員として育成する場であった英学塾で演じられた劇の中で、「ドクター・日本」を女性医師として描く必然性は、大きくなかったのである。

「医者意見の合わぬ時」に唯一登場する女性配役は西太后の化身である「おばあさん」だが、彼女の存在は日本人女性の役柄が不在であることの意味をさらに深く理解する手掛かりとなる。「おばあさん」は当時西太后が欧米でそう呼ばれたように、ヨーロッパのドクターたちから「ドラゴン」と呼ばれ、この単語には「悪婆」と注釈が付けられている。⁵⁷しかし実際の劇中の行動を見てみると、彼女は実にかいがいしく「ご隠居様」の世話をする看護婦である。薬は彼女の手作りで(「迷信薬」だが)

病人に与えるときには口元まで運んでやるし、彼が眠った後は、「布団の皺をのぼし、枕をまっすぐに」なおし、眠りを妨げないよう静かに退出していく。⁵⁸ 患者に思いやりがあるという点では、他のどの登場人物よりも献身的であり、当時の規範で言えばいかにも「女らしい」と思われたかもしれない。

看護を女性の適職とするのは、ヴィクトリア期のアメリカの価値観に沿うものだった。ベーコンがアメリカで教師をしていた時に設立に尽力したディキシー看護学校も、黒人女性を看護婦として育成するために作られたものだった。⁵⁹ また、捨松が留学から帰国する前に地元の看護学校に通ったり、ベーコン初来日中の1888年に津田が『女学雑誌』に「女子看護法の心得」を連載したりと、ベーコンと親しいエリート日本人女性たちにとっても看護は重要な関心事だった。⁶⁰ 特に、有名なイギリスの看護婦、フローレンス・ナイチンゲールを優れた女性のロール・モデルとして敬愛し、その著作を熟読していた津田は、きちんとした看護ができないのは、「女たる者にとりて一つの大きな欠典として惜しむべきことではございませんか」と述べ、「病人を看護するは女たる者の重なる職分の内」、「看護法は婦人の必ず心得居らねばならぬことでございます」と、女性こそが看護知識を身につけるべきだと訴えている。⁶¹ しかし、ベーコンや津田にとって、看護は単に女性が優しく病人の世話をすることを意味するのではなかった。「女子看護法的心得」の中で、津田は「吾等が吐き出す空気は毒にて肺より出る酸素ガス並に其他の排泄物が充て居ります」、「健康なる人の肺より吐出せる水気又汗と為りて皮膚より出ます水気の高は一日平均『三パイント』即ち吾七合位にして」など、「衛生の法」に関する知識を披露している。⁶² ここで言う看護は、衛生学や栄養学などの科学的な知識に基づいた心得のことで、単純な女性の優しさではない。逆に、優しすぎる母親が医者^{おち}の忠告を無視して病気の子供に食べたがるものを与えてしまうことを「刀を以て其身を切るか或は毒を飲むを見て母が夫れを構はずにおくと同じこととございます」と評し、「愛に溺れ」ることを厳しく批判している。⁶³

津田が述べた看護の心得は、職業には結びつかない、あくまでも妻として母として家庭で行う範囲のものであり、「人の母たる者、即ち小児の保護者たる人」である女性が身につけているべき「衛生の道」だった。⁶⁴ それは、アメリカの反生体解剖論者が糾弾した生体解剖を必要とする利己的で男性的な科学とは異なり、命を守り、「子孫を永続せしむるの方」であり、母性的な慈愛に基づいた科学知識であった。津田によれば、日本女性たちがこうした看護を家族に提供できるかどうかは個人的な問題

ではなく、国民全体の子孫の体が強くなるか弱くなるか、そして「運よきも運わるきも」決まってしまうほどの国家の命運を分ける重大事だった。⁶⁵家事を高度に体系化することで、主婦としての女性の仕事を「男性の領域」の賃金労働と比べても遜色のない、国家の発展に寄与する事業に位置づけようとするドメスティック・フェミニズムの世界観を、ここに見ることができる。

「医者意見の合わぬ時」の中で、西太后は愛情に満ちた女性として描かれているが、観客の女性たちの観点からすれば、彼女は啓蒙された女性の務めである「衛生の道」を知らぬ、迷信深く非文明的な女性の象徴、ひいてはその国の人々の劣等性の象徴でもあった。英学塾の学生や関係者をはじめとする観客たちは、反面教師である「おばあさん」こと西太后の姿を通じて、実際にはこの劇に登場しない日本人女性のあるべき姿を見ていた。それは、文明の点から言えば迷信深い「おばあさん」の対照を成す存在でありつつ、慈悲の精神を持つ「ドクター・日本」という男性医師と釣り合いのとれた日本人女性像である。そしてそれは無論、津田の「女子看護法の心得」に示された、女性らしい細やかな心遣いとともに、正しい衛生知識をもって看護を行う、開明的な女性像と一致していた。ベーコンは「おばあさん」に異文化の女性を代表させ、その他者性・劣等性を描くことで、これに優越する日本人女性たちの自己意識を高めようとしたのである。

また、津田やベーコンのジェンダー観を支えたドメスティック・フェミニズムの価値観に沿えば、この劇のヒロインの不在はさほど不可解なことではないとも言える。生体解剖の危機から弱者を救う、そもそもは女性的な慈悲の精神が「ドクター・日本」という男性の役柄によって発揮されることで、女性が男性に及ぼす影響力の強さをも示すことができたからだ。アメリカで女性の美德が重視されたのは、家庭での養育を通し男児にその価値観が伝えられ、立派なアメリカ市民となった彼から間接的にその徳が社会に還元されていくと考えられたからである。その意味で、女性的な慈悲の精神を身につけた「ドクター・日本」は、ベーコンや津田が育てようとした、「正しい」女性性を持つ日本人女性、良き母たちの生み育てた、良き息子なのである。この劇の中で、慈悲の精神や弱者への憐みなどの女性的な価値観は男性の役柄により表現されたが、彼を通じて、新しい時代の日本人女性と国家とのかわり方が示されている。この劇に日本人女性は直接登場しないが、不在であることで逆説的にその存在と影響力の大きさを示している。

同時に舞台上での女性の不在は、家庭性や美德を女性のアクティヴィ

ズムの根拠とするドメスティック・フェミニズムの特徴と限界を端的に象徴するものでもある。女性に特有の美德や母性を強調した思想に依拠すれば、根源的には妻や母であること以外の方法で、積極的な女性の役割を確立し得ない。こと劇中に描かれたような国際紛争の際には、妻として母として、喜んで戦争に夫や息子を差し出すことが女性の究極の国家への貢献だとされた。日清戦争時、津田はこの戦争に果たした日本人女性の役割について、アメリカで英文のエッセイを発表しているが、そこで彼女が最大の称賛を与えたのは従軍看護婦でも銃後の献金活動をする女性たちでもなく、不安を隠し笑顔で夫や息子を戦地に送り出し、彼らの戦死を名誉なことだと誇る妻や母たちであった。⁶⁶ 劇中、「ドクター・日本」はこの日清戦争を、「私が数年前に清老人に施した困難な手術」と呼んでいるが、国際紛争時の究極の正しい女性の役割は紛争の現場にいないこと、遠く離れたhomeたる祖国/家庭にとどまり、良き妻、賢き母として男性を差し出すことだった。⁶⁷ その意味でも「おばあさん」こと西太后は、紛争の現場に登場して男女の領域を混乱させる、好ましくない存在だった。中国大陆をめぐる列強の争いを描いたこの劇に日本人女性が登場しないのは、この劇の製作にかかわった女性たちのジェンダー意識の中で、その場にはいないことが「正しい」女性の役割だったからである。

おわりに

西木政江は同窓会会報で「医者意見の合わぬ時」をふりかえり、「当夜出席せられた方々は、必ず思い出し給う事でしょう。ドクトル、ニホンが貧乏徳利をさげて出場せられた事、長椅子に横たわれる病人のうなり声等を」と記している。⁶⁸ 各国の帝国主義的欲望を描き、生体解剖に反対するという重たい主題の劇ではあったが、「笑劇」と形容されたことから推測できるように、観客は若い女生徒たちが「ドクトル」たちや病む清国を熱演するのを見て、笑いの渦に包まれたようである。

劇を通して、ベーコンと日本の女性たちは、まず日米の絆を確認していた。日本は隣国の清と同じ立場にあるのではなく、むしろ欧米列強とともにその病状を憂う文明国であった。その清国に対して「正しい」診断と治療ができるのは日本であり、それを支えるアメリカであった。さらにここに英国の医師が加わることで、英語という言語を共有する文明の共同体が生まれた。その意味で、正にこの劇は「英学塾」で演じられ

るにふさわしいものであった。

一方、ここには過度の科学主義に反対し、「人道」を大切にす女性の共同体も生まれていた。理性や進歩という名目の科学至上主義ではなく、動物や弱者の命を守り、節制や徳を大切にすることを主張する、アメリカの白人ミドルクラスの女性の価値観がこの劇では重視されていた。ベーコンはこのような劇を生徒たちに演じさせることで、近代化が急速に進む社会において、女性がどのような役割を担うべきかを伝え、またそれによって日米の女性の絆を強化しようとした。しかしそこにはある種の矛盾が内包されていたのも事実である。ベーコンが書き下ろした劇の主要な役はすべて男性であり、女子学生たちは観客の女性を前に、日本、アメリカという立派な男性を演じなければならなかった。彼女たちは男性に扮し、男性の姿を通じて、女性の徳を称揚し、女性間の連帯を強化しようとしたのである。

このような矛盾は観客の笑い声にかき消されてしまったのかもしれない。しかしそれはベーコンとその仲間の日本人女性たちが直面したジレンマを象徴していた。アメリカ人であるベーコンは、「進歩」の名の下に急速に変容する、医学や科学の発展などの近代社会の諸現象に漠とした不安を抱きつつも、日本においては英語教師として近代化の一端を担っていた。津田ら日本のエリート女性たちは、欧米諸国に追いつくべく急速に進められた近代化政策に自らの人生を翻弄されつつ、「日本人女性」という新たなアイデンティティを獲得しようと格闘していた。その両者ともが、女性同士の絆を強調し、女性にのみ与えられたある種の徳の存在を信じ、変わりゆく社会の中で積極的な女性の役割を模索していたのである。彼女たちは、教養ある女性の連帯こそが、近代が不可避的に生み出す諸問題を正す鍵であると考えていた。しかしその一方で、清国を列強によって救われるべき「病」を抱えた存在としたベーコンの劇にみられるように、結局その言説は「国境」「人種」「進化」などの近代的概念を一層強化することにもなったのである。

Notes

- 1 『会報』第一号（女子英学塾同窓会，1908年6月30日発行）、4-5頁。後に『会報』にこの日の文学会の報告をよせた西木政江は、会が11月28日に行われたと書いているが、その原本である手書きの「女子英学塾日誌一」によると、同月30日に行われたことになっている。「女子英学塾日誌一」（自明治三十三年九月十一日、至明治四十二年九月二日）津田塾大学津田梅子資料室蔵。また、津田梅子がアメリカの養母に当たった同年11月29日付けの手紙からも、この会が30日に行われる予定であっ

- たことが分かる。Yoshiko Furuki, et al., eds. *The Attic Letters: Ume Tsuda's Correspondence to Her American Mother* (New York: Wetherhill, 1991), 377-78. 西木については註2を参照。なお、本稿における人物の名前の表記は、アメリカ人、日本人共に姓のみを基本とするが、同姓の人物と区別が難しい場合には名で表記する。
- 2 『会報』、6頁。旧仮名遣い、旧漢字を適宜改めて引用した。原文ではこの学生の名は「西木政江子」となっているが、明治期には女子名の終わりに一律に「子」をつけて記載することが多く、また英文で記された彼女の名前が Masae あるいは Masaye となっているので、ここでは「政江」とした。彼女の名が「政枝」と記載されている英学塾関連の文書もあり、どちらが正しいのか、あるいは改名したのか、明らかにできなかった。西木は1901年に英学塾に入り、第一回卒業生として1903年に卒業している。
 - 3 Theodore Davenport Bacon, *Leonard Bacon: A Statesman in the Church by Theodore Davenport Bacon*, edited by Benjamin W. Bacon (New Haven: Yale University Press, 1931), 94.
 - 4 Carl N. Degler, *At Odds: Women and the Family in America from the Revolution to the Present* (New York: Oxford University Press, 1980), 8-9; Barbara Walter, "Cult of True Womanhood, 1820-1860," *American Quarterly* 18 (1966): 152-74.
 - 5 Glenna Matthews, "*Just Housewife*": *The Rise and Fall of Domesticity in America* (New York: Oxford University Press, 1987), 92.
 - 6 Hugh Davis, *Leonard Bacon: New England Reformer and Antislavery Moderate* (Baton Rouge: Louisiana University Press, 1998), 145.
 - 7 久野明子 『鹿鳴館の貴婦人大山捨松 日本初の女子留学生』(中公文庫、1993年)、107頁。
 - 8 生田澄江 『瓜生繁子 もう一人の女子留学生』(文藝春秋企画編集部、2009年)。
 - 9 より詳しいベーコンの生い立ちについては、拙稿「Alice M. Baconの日本論と世紀転換期のアメリカ：ベーコンの人生を軸に」『国士館大学教養論集』66号(2009): 11-28頁を参照。
 - 10 津田梅子に関する研究を行った高橋裕子は、『女たち』がベーコンと津田の共著に近い作品だったと指摘している。高橋裕子 『津田梅子の社会史』(玉川大学出版会、2002年)、142頁。なお、『女たち』についてのより詳しい分析は、拙稿「白人女性とオリエンタリズム：Alice M. Baconの『明治日本の女たち』」『国士館大学教養論集』68号(2010): 1-24頁。
 - 11 アリス・ベーコン著、矢口祐人・砂田恵理加訳 『明治日本の女たち』(みすず書房、2006年)、99頁。本書は、*Japanese Girls and Women* の1902年に出版された拡大修正版の日本語訳である。初版は1891年出版。
 - 12 ベーコン、75頁。
 - 13 前掲書、100頁；Barbara Rose, *Tsuda Umeko and Women's Education in Japan* (New Haven, CT: Yale University Press, 1992), 91.
 - 14 ベーコン、98頁。
 - 15 津田英学塾編 『津田英学塾四十年史』(津田英学塾、1941年)、51-52頁。
 - 16 Daniel Scott Smith, "Family Limitation, Sexual Control, and Domestic Feminism in Victorian America" in *Cleo's Consciousness Raised: New Perspective on the History of Women*, ed. Mary

- Hartman and Louis W. Banner (New York: Harper Torchbooks, 1974); Karen J. Blair, *The Clubwoman as Feminist: True Womanhood Redefined, 1868-1914* (New York: Holmes & Meier Publishers, Inc., 1980), 4. ダニエル・スコット・スミスは19世紀の白人女性の生涯出生数の減少に注目し、夫婦間における性行為への妻の決定権拡大の意味を分析した際、ドメスティック・フェミニズムというフレーズを使った。しかしブレアーをはじめとするのちの研究者たちはより広義にこれを解釈し、女性たちの社会活動の思想的背景を説明する語として使っている。
- 17 ベーコンの近代に対する不安感については、拙稿、「Alice M. Bacon と怪談牡丹燈籠 “The Peony Lantern” に見る世紀転換期のアメリカ知識人」『政経論叢』 通号 137・138 合併号 (2006) 国土館大学政経学会: 253-78; 拙稿「『内側』からの風景: Alice M. Bacon と『明治日本の内側』」『AJ ジャーナル』4号 (2009) 国土館大学アジア・日本研究センター: 25-40 頁で論じた。
- 18 ベーコンは、1897年にニューハンプシャー州ホルダーネスの森の中に土地を買い求め、ここにディーブハイヴンと銘打ったキャンプを設立した。彼女の友人たちが「滞在費を払うゲスト」として、いくつかのコテージが建つだけのこの湖畔のキャンプに集い、共に長い夏をすごした。ディーブハイヴンについては、拙稿「Alice M. Bacon の日本論と世紀転換期のアメリカ」、16-17 頁。
- 19 T. J. Jackson Lears, *No Place of Grace: Antimodernism and the Transformation of American Culture, 1880-1920* (Chicago: The University of Chicago Press, 1994), xvi.
- 20 ジュディス・バトラー『ジェンダー・トラブル: フェミニズムとアイデンティティの攪乱』(青土社、1999年)。
- 21 Alice M. Bacon, “When Doctors Disagree: An International Farce.” 『英学新報』 1902年第1巻4号, 「新年附録」: 1.
- 22 『会報』、6 頁。
- 23 Bacon, “Doctors,” 1. 旧仮名遣いを適宜改めて引用した。ベーコンが当時この雑誌の編集者だったことを指して、彼女のことを「本社の」と表現している。
- 24 Ibid., 3.
- 25 Ibid., 2, 5.
- 26 Ibid., 4.[]内補足は引用者による。
- 27 Ibid., 5.
- 28 Ibid., 3, 5.
- 29 内藤千珠子によれば、世紀転換期の日本のマスメディアの中では、血や精神に問題があるために病にかかりやすい存在として、「支那人」を含む日本人以外のアジアの人種や民族、女性、貧民や労働者、そして「日清戦争の結果新たに植民地化されようとした『新領地』」が頻繁に取り上げられていた。その多くが近代的な衛生政策を享受できなかったこうした人々は、その「不潔さ」故に病を誘発しやすいとされた。そして、「病によって語られ」ることを通じて病毒に弱いということが、あたかも彼らの人種的・生物学的特性であるかのように認識されていたという。その意味で、ベーコンがこの劇で描いた清国の姿は、当時の日本に流通した病と人種の連想に合致している。内藤千珠子 「病う身体 「血」と「精神」をめぐる比喩」金子明雄・

- 高橋修・吉田司雄ほか『ディスクールの帝国 明治三〇年代の文化研究』(新曜社、2000年)、77頁。
- 30 Edward Shorter, *Doctors and their Patient: A Social History* (New Brunswick: Transaction Publishers, 2007), 75.
- 31 Ibid., 75-106.
- 32 Craig Buettinger, "Women and Antivivisection in Late Nineteenth-Century America," *Journal of Social History*, 30 (summer, 1997): 858.
- 33 Nicolaas A. Rupke, ed., *Vivisection in Historical Perspective* (London: Croom Helm, 1987), 238-39.
- 34 ジェイムス・ターナー著、斎藤九一訳『動物への配慮』(法政大学出版局、1994年)、150頁、166-67頁。
- 35 前掲書、148頁。[]内補足は引用者による。
- 36 前掲書、165頁。Patricia Peck Gossel, "William Henry Welch and the Antivivisection Legislation in the District of Columbia, 1896-1900," *The Journal of the History of Medicine and Allied Science*, 40 (October 1985): 397-419; Susan E. Lederer, *Subjected to Science: Human Experimentation in America before the Second World War* (Baltimore: The Johns Hopkins University Press, 1995), 56-59.
- 37 Buettinger, 857.
- 38 Bacon, *Interior*, 229; Frances Power Cobbe and Benjamin Bryan, *Vivisection in America* (Cheshire, UK: Portrayer Publishers, 2002), Originally published in 1890, 2.
- 39 Cora M. Folsom, "The Dixie Hospital in the Beginning," *The Southern Workman*, March 1926, 122.
- 40 津田英学塾、418頁。
- 41 "Quaint Japanese Camps in New Hampshire" unidentified article. Bacon Family Papers no. 46, Box1, Folder "Bacon, Alice," Yale University Archives, New Haven, Connecticut. この史料はベーコン・ファミリー文書内、アリス・ベーコンのファイルに残された新聞の切り抜きで、発行日、紙名ともに記載がないが、記事には「グローブ紙のリポーター」そして、「2年前の火事」という記述がある。記事が取り上げたベーコンの主催していたキャンプ、すなわちディープヘイヴンでは1907年に大きな火事があったので、これが1909年に発行されたグローブ紙の切り抜きであると判断できる。この記事はさらに、ドッグショーで優勝した1頭について、「2000ドルでも売らない」というベーコンのコメントを伝えている。2000ドルは英学塾開校の元手とするために、「日本における津田嬢の学校を支援する委員会」が1900年に集めた寄付金の額に相当する。古木宜志子『津田梅子』(清水書院、1992年)、150頁。
- 42 Bacon, "Doctors," 3-4.
- 43 Lederer, 29. Ledererによると、1909年の時点で、全米334の人道活動組織のうち、104の組織が動物だけを対象に活動しており、45が人間の子供のみ、残りの185が動物と人間の子供との両方の救済を目的にしていた。
- 44 Ibid., 101. 兵士は囚人と同様、強制的に人体実験の被験者とされるリスクがあるとされた。全米初の女性医師として知られるエリザベス・ブラックウェルは、特に貧し

- い人たちが科学的医学の実験材料にされるのではないかと憂慮していたという。Carla Bittel, “Science, Suffrage, and Experimentation: Mary Putnam Jacobi and the Controversy over Vivisection in Late Nineteenth-Century America,” *Bulletin of the History of Medicine*, 79 (winter 2005), 683-84; Lederer, 37.
- 45 Lederer, xiv-xv. “Human vivisection” という言葉のこうした用法は、1930年代まで続いた。
- 46 Bacon, “Doctors,” 3.
- 47 ターナー、185頁。
- 48 Bittel, 682.
- 49 Ibid.; Buettinger, 857-63; Lederer, 35-37.
- 50 Bittel, 682; Buettinger, 860.
- 51 Buettinger, 863.
- 52 Ibid., 864; Lederer, 37.
- 53 Buettinger, 869.
- 54 Ibid., 857. [] 内補足は引用者による。一般的に chivalry、すなわち騎士道精神は名誉、忠君、礼節、武勇を重んじ、女性を敬い、弱きに与するといった、中性の騎士に望ましいとされた男性的な美德を指すが、ここでは弱者へ慈悲をかけ、不正義を正す、真の女性性の精神を表す言葉として使われている。世紀転換期を迎え、ますます世俗化の進むアメリカ社会の中で、騎士道精神のような古風な美德を維持しえたのは、俗世の垢にまみれない高潔な女性だけだという自負心が、こうしたレトリックを生み出したのではないか。
- 55 ベーコン、287、295頁。
- 56 津田梅子、津田塾大学編『津田梅子文書』(津田塾大学、1984) 6頁。後述の「女子看護法の心得」からの引用である。「女子看護法の心得」は1888年『女学雑誌』第135-142号にかけ、7回に分けて連載された。原本では全ての漢字にルビがふってあるが、『津田梅子文書』には一部仮名遣いを改め、ルビを除いたものが転載されている。ここでは『津田梅子文書』から引用したが、原本を参照し、一部にルビをふった。同書からの引用については、以下同様。
- 57 Bacon, “Doctors,” 2.
- 58 Ibid.
- 59 Folsom, 122, 125.
- 60 Ibid., 125.
- 61 津田、6-7頁。以下同様。津田は1899年に訪欧した際にナイチンゲールと面会しており、「イギリス女王にお目にかかるよりもうれしい」と書き残している。津田、335頁。津田が腸チフスを患った妹のふき子の看病のためにナイチンゲールの著書を熟読していた事に関しては、Rose, 121.
- 62 津田、9-10頁。
- 63 前掲書、12頁。
- 64 前掲書、7-8頁。
- 65 前掲書、15頁。
- 66 前掲書、49-69頁。

Alice M. Bacon's "When Doctors Disagree"

67 Bacon, "Doctors," 4.

68 『会報』、6頁。旧仮名遣い、旧漢字を適宜改めて引用した。